

## 新教科創設期における生活科の カリキュラム開発に関する研究

—愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の『単元指導計画』の作成過程を中心に—

白 井 克 尚

愛知東邦大学

# 新教科創設期における生活科の カリキュラム開発に関する研究

—愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の『単元指導計画』の作成過程を中心に—

白井克尚\*

## 目次

1. 研究の目的
2. 全校体制での生活科のカリキュラム開発
  - (1) 三つの部会と研究組織
  - (2) 育てたい子どもの姿を中心に据えた研究主題
3. 『単元指導計画』の編成の論理
  - (1) 『単元指導計画』の設定にあたって
  - (2) 『単元指導計画』における単元主題
4. 『単元指導計画』の作成の実際
  - (1) 生活科マップと生活科ごよみ
  - (2) 「みと山へ たんけんにいこう」の単元構成と見直し
5. 研究の成果と課題

## 1. 研究の目的

戦後教育で初めての新教科創設の試みであった1992年度からの生活科の誕生の際には、文部省より委嘱を受けた全国51校の生活科に関する研究推進校において、生活科カリキュラムの開発研究が行われていたことが大きく関係していた。生活科に関する研究推進校では、生活科が全面实施される以前の1988年度から1990年度にかけて（1991年度は、生活科推進協力校）、生活科の指導計画の作成、指導方法の工夫、教材の開発、授業実践などについての研究が取り組まれ、教材開発や単元計画作成の形で、生活科の授業像を明確にしてきた。つまり、全国での生活科カリキュラムの全面实施に、実践的根拠を与えたのが、生活科に関する研究推進校における生活科のカリキュラム開発の取り組みであったといえる。

生活科の誕生に関わるこれまでの先行研究では、吉富・田村（2014）が、生活科の誕生に携わった関係者へのインタビュー調査を通じて、生活科誕生の経緯を明らかにしている<sup>1</sup>。しかし、この研究の主な関心は、生活科の学習指導要領誕生の経緯にある。これまでも、中野光（1993）が、「問題は前史としての生活科、あるいは生活科的なるものを支えた教育観とか子ど

---

\* 愛知東邦大学教育学部

も観、あるいはカリキュラム理論が、いまきちんと受け継がれ発展させられようとしているかどうか<sup>2</sup>といった研究史的課題を指摘しているが、現在において、そうした生活科が本当に必要とされた新教科創設期に立ち返り、歴史の中のカリキュラム開発の取り組みに示唆を探ることは、意義あることだと考える。

本稿で事例として取り上げる愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校（現豊川市立、以下、御津南部小<sup>3</sup>）は、新教科創設期における愛知県下で唯一の生活科に関する研究推進校であり、全国の研究推進校を代表する開発研究がなされていた。当時の文部省生活科教科調査官であった中野重人（1990）も、「研究への意欲とその内容において、常に研究推進校の先端にあった」といい、とりわけ、第1年目の研究を総括し、第2年目の方向と課題を明確にするために設けられた1989年度の全国の研究推進校の連絡協議会において、2校の研究発表校の中の1校に選ばれたことから、「全国から注目されるところとなった<sup>4</sup>」と述べている。この御津南部小の開発研究に関しては、福應（2013）<sup>5</sup>によって、生活科授業づくりの取り組みの紹介が行われている。しかし、生活科のカリキュラム開発の面からの探究はなされていない。したがって、本稿では、御津南部小を事例として、新教科創設期における生活科に関する研究推進校でのカリキュラム開発が、いかなる視点に基づいて取り組まれ、そこでのカリキュラム編成は、どのような論理をもっていたのかについて明らかにする。こうした作業は、より良き生活科のカリキュラムの本質を考える上でも意味あることとなろう。

## 2. 全校体制での生活科のカリキュラム開発

### （1）三つの部会と研究組織

御津南部小は、愛知県東三河地方に位置し、豊橋市、蒲郡市などに隣接していた東海道本線沿いの三河湾に面した御津町（2008年に宝飯郡から豊川市へと合併）に所在していた。町の中心には、標高94メートルの自然豊かな御津山があり、山頂には児童遊園が作られていた。歴史的にも愛知県三河地域では、問題解決型の教育実践が展開されていたことも一つの教育風土として存在していた<sup>6</sup>。そうした特色ある教育風土をもつ地域において、御津南部は、文部省より三年間の教育課程の基準改善のための「研究開発校」<sup>7</sup>（愛知県教育委員会ならびに東三河地方教育事務協議会は、1988年・1989年度の研究委嘱）の指定を受けて、「生活科に関する研究推進校」として生活科のカリキュラム開発に着手していったのである。

1988年4月12日に、御津南部小は、東京の国立教育会館において全国の研究推進校の連絡協議会に参加した。ここで、全国の研究推進校に、文部省資料『生活科研究の視点』が手渡され、この資料を唯一の手がかりに研究を進めたという。そして、御津南部小では、資料1<sup>8</sup>のような研究組織で三か年の研究を進めていった。

資料1のように、御津南部小における研究組織は、「児童理解部」「授業研究部」「合科・総合活動部」という三つの部会構成からなり、それぞれの部会において課題の設定や検討が行われていった。児童理解部では、子どもの実態把握や授業の評価方法などの探究が行われ、授業研究部

## 資料1 御津南部小の研究組織

部会の構成	部会の活動内容
児童理解部 (社会性育成部会) 個のレベルを主な視点として	◎ 子どもの実態把握 (社会性等)、教材開発 ◎ 授業の評価方法の探究 ○ 道徳の指導内容と生活科・特別活動
授業研究部 (学力形成部会)	◎ 授業実践に基づいた単元の検証法 ○ 学習活動の工夫 ◎ 年間指導計画の作成、授業の記録
合科・総合活動部 (健康体力部会) 集団のレベルを主な視点として	◎ 自己認識の学年での発達段階のおさえ ◎ 生活科との合科的な指導の計画と系統性 ◎ 御津南タイム、めざめタイムの運営 ○ ゆとり時間の活用、異学年・学級交流 ◎ 学習環境の整備＝栽培園、小動物等の飼育

では、年間指導計画の作成や授業の記録などが行われ、合科総合活動部では、自己認識の学年での発達段階の検討などが行われていた。つまり、御津南部小では、全校体制で組織的に研究が取り組まれていたことがわかる。そうしたなかで、研究2年次の1989年10月に、生活科の『単元指導計画』が発表され、全国での生活科の全面実施に向けて、生活科のカリキュラムという形で資料が提供されたのである<sup>9</sup>。このように、御津南部小における生活科のカリキュラム開

発は、全校体制で計画的に取り組まれていたことが明らかになる。

### (2) 育てたい子どもの姿を中心に据えた研究主題

次に、御津南部小では、文部省『生活科活動参考例』を参考にして、生活科の特色を考えていった。御津南部小の考えた生活科の特色とは、①具体的な活動や体験を重視する。②自分との関わりで、自然や社会をとらえる。③自分自身への気づきを大切にす。④日常生活に必要な習慣、あるいは技能を身につけさせる<sup>10</sup>という4つのポイントであった。ここからは、御津南部小が、文部省より示された「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」という生活科の基本目標に基づいて、生活科の特色を構想していたことがわかる。

そうしたなかで、御津南部小は、研究主題を、「自ら考え進んで行動できる子どもを育てる授業をめざして」と設定し、実践研究に取り組んでいった。この研究主題は、①自ら考えて進んで行動できる子どもは、自立感の持てる子どもでもある。②自ら考えるには、自らの問いかけが必要であり、そのためには、「めあて」を持って物を作る、飼育する、世話をするといった活動やさまざまな取り組みがなされなければならない。③自ら考えるには、他の考えや教えを受容できることが必要である、といった「育てたい子どもの姿」<sup>11</sup>にもとづいていた。このように御津南部小は、育てたい子どもの姿を研究の中心に据えて、自発的に研究主題を考えていたのである。また、研究主題の子どもの具体的な姿を、生活科の授業場面では、資料2<sup>12</sup>のように考えていった。

## 資料2 自ら考え進んで行動できる子どもの具体的な姿

ア	自分のことは自分でできる子ども	[基本的な生活習慣、技能]
イ	集団生活になじむことができる子ども	[社会性、道徳性、仲間意識]
ウ	自分の考えや気持ちが伝えられ、友だちの話に耳を傾ける子ども	[表現力、自己表出、自他の受容]
エ	めあてを持って生き生きと行動し、自分自身への気づきを高める子ども	[対象への気づき、意欲] [自分自身への気づき]

このように御津南部小は、具体的な生活科の授業場面における研究主題の子どもの姿を、人格の形成（理解・技能・意欲）に結びつけたところに特徴があった。そのようにして、御津南部小学校では、生活科の授業を通じて育てたい子どもの姿を研究の中心に据えることにより、自主的な生活科のカリキュラム開発研究が可能となっていたのである。さらに、合科・総合的学習部会が中心となり、めざす子どもたちの「自分自身への気づき」（自己認識）と学年のおさえについても、資料3<sup>13</sup>のように考えていった。

## 資料3 めざす子どもたちの「自分自身への気づき」と学年のおさえ

		1年	2年
自他とのかかわり		自分の好みに合う友だちを、何人かつくることができる。	友だちのことに気をつかったり、仲良くできる。
自分自身の成長		自分の成長や変化が身近な人々によって支えられていることに気づく。	自分の成長や変化が社会の多くの人々によって支えられていることに気づく。
自他のよさ・取り柄	学習の仕方	自他の違いを見つけることができる。	ものごとを関連づけて考えることができる。
	自分の能力や機能	自分の良さや取り柄に気づく。	自分の良さや取り柄の理由づけができる。
	努力・成果の評価	努力や具体的な成果に気づくことができる。	努力や具体的な成果に喜びを持ち新たな挑戦ができる。

このような御津南部小のめざす子どもたちの「自分自身への気づき」は、生活科の中核的なねらいである自立の基礎を養うというねらいに沿って導き出されていた。すなわち、御津南部小学校のめざす子どもたちの「自分自身の気づき」は、子どもたちの実態に照らし合わせて構想されていたのである。すなわち、御津南部小では、「子どもから始まり、子どもで終わる」<sup>14</sup> 研究を志向していたことも示される。

### 3. 『単元指導計画』の編成の論理

#### (1) 『単元指導計画』の設定にあたって

これまでに述べてきたような研究主題や子ども理解に基づいて、御津南部小では、授業研究部会が中心となり、1989年10月に、研究2年次の研究発表会を開催し、『第1学年 年間指導計画』『第2学年 年間指導計画』を作成した。この『単元指導計画』の作成過程としては、まず、研究1年次の1988年度に、文部省『生活科研究の視点／活動参考例』を参考にして、第1学年の単元内容の系統表を作成することがめざされた。次に、同年5月に、第1学年単元「公園へいこう」（12時間扱い）の教材発掘を行い、単元指導計画をペア学年（例：1年1組と6年）で作成していった。そこで提出された留意点をふまえ、御津南部小では、研究1年次の1988年度に、資料4<sup>15</sup>のような視点を設定し、1年生の七つの『単元指導計画』の作成に取り組んでいった。

#### 資料4 単元指導計画の設定にあたって

##### 〇〇単元『 』の指導計画の設定にあたって

- 1 教材を発掘する
  - (1) 現地、子どもの遊び、子どもの日記・記述等から具体的な活動・体験を構想する。  
一どのような手立てを通して探ったか—
    - ア. 文部省資料による目標分析・単元内容の軽投票を参照し、具体的な活動・体験をそれに重ねて目標を決める。(子どもの姿を目標に重ね合わせる)
- 2 具体的な活動や体験を構成する。
  - (1) 中心的な活動と内容選択の視点を位置づける                      中心的な活動として位置づける意味
  - (2) 構成上の工夫(教材の配列)をする
  - (3) 子どもの活動意欲の持続性をもたせる                              オープン・エンドになる目標
- 3 教師の単元にかける願い
  - (1) どの子を単元展開の軸にするかを検討する。(担任のその子にかける願い)
    - ア. 年度当初に出した学級の「気になる子」を位置づける。
    - イ. 単元の抽出児を想定する
- 4 子どもの内面の表出と表現活動
  - (1) 内面の表出にふさわしい表現活動とその可能性を探る
  - (2) 問題意識や新たな活動意欲を育てる
- 5 他の単元との内容(活動内容を含む)系統・関連を図る
- 6 評価活動を位置づける    自己評価(子ども自ら)  
(南のための評価かを明確にする)                                      他者評価(教師による)
- 7 単元実践上の問題点    場所、人、安全、時期、時機

このような視点からは、御津南部小が独自の視点により、教材の発掘や単元構成や設定を行い、『単元指導計画』の作成に取り組んでいたこともわかる。しかし、そうした作業過程の中で、「生活科研究の難しさ」も浮かび上がっていた。単元「こんにちはあかちゃん」・単元「みと山で あきをさがそう」に関する協議では、以下のような課題も提出されていた。単元「こんにちはあかちゃん」では、課題として浮かんだこととして、①目標のおさえかた：重点的な目標とその他の目標の位置づけ、目標の構造化②表現活動のさせ方：活動や体験に弾みを持たせる表現、活動意欲や問題意識の持続、個性的な表現と多様性を持たせる③単元の細分化：小単元を独立した単元として扱う場合の目標の設定の仕方④生き物との触れ合い：触れ合いの場所や時期の設定<sup>16</sup>などといった課題が明らかになった。また、単元「みと山で あきをさがそう」では、課題として浮かんだこととして、①具体的な活動や体験をさせた場合、事後の表現活動は、狙いを明確にする必要がある。活動や体験の充実があつてこそ表現が生きてくる。②身近な自然を教材として生かす場合、子どもたちの自分とのかかわりという視点が大切である。この「かかわり」を、今つながっているものだけに限定しないで、子どもたちの生活にとって必要であるという視点からの選択もあるのではないか。③現場での表現活動も考慮すべきではないか。表現活動を教室に閉じ込めて考えてはいないか<sup>17</sup>などといった課題が提出された。こうした課題の解決のために、各部会において協議がなされ、より良い『単元指導計画』の作成がめざされていったのである。つまり、新教科創設期における御津南部小の生活科のカリキュラムは、独自の視点から、地域や子どもの実態をふまえて編成されていたことが明らかになる。

## （２）『単元指導計画』における単元主題

さらに、児童理解部会では、地域や児童の実態をふまえて、生活科の実践に即して考えられる活動を具体的に考えていった。校長の萩原正彦も、「子供と身近な地域の素材との接点をとらえ、その日常的なかかわりの実態を明らかにし、子供の活動の姿で描いてみるのが大切である。地域と子供を結ぶ作業こそが単元指導計画作成の大切なポイントになると思う」<sup>18</sup>と述べていた。資料5～8<sup>19</sup>は、そうした地域や児童の実態をふまえて、御津南部小で考えられる体験活動をまとめたものである。

資料5 御津南の子どもたちに、生活科を通してどんな体験をさせたいか。(触れさせたい環境や行事・人々)

	実態	考えられる体験活動	単元・教科との関連
ア. 土地の様子から	○海  ○御津山  ○音羽川	・海の生き物をつかまえる。飼育する。 ・海辺の植物や砂、貝がらなどで遊ぶ。 ・海をきれいにする。 ・虫をつかまえる。飼育する。 ・木の葉や木の実を使って遊ぶ。 ・公共物を使って遊ぶ。 ・木のぼりをする。 ・川の生き物をつかまえる。 ・川辺の植物で遊ぶ。浮かべて遊ぶ。	1年「わたしとうみ」 1年「いきものをそだてよう」 1年「わたしとうみ」 1年「こうえんへいこう」 1年「みとやまであきをさがそう」 〃 〃 1, 2年「いきものをそだてよう」 2年「おもちゃ大会をしよう」
イ. 町の様子から	○御津町商店街 ○御津駅 ○保育園 ○児童館 ○椎の木公園・市木公園  ○左脇神社・御馬神社	・買い物をする。 ・電車に乗り降りをする。 ・交流をする。 ・本を借りる。部屋などを利用する。 ・虫をつかまえる。 ・木の葉や木の実を使って遊ぶ。 ・公共物を使って遊ぶ。 ・虫をつかまえる。木の葉や木の実で遊ぶ。 ・公共的な場で遊ぶ。	2年「わたしの町を調べよう」 2年「冬のくらしを調べよう」 1年「もうすぐ2年生」 2年「わたしの記録を作ろう」 2年「わたしの町を調べよう」 1年「こうえんへいこう」 1年「いきものをそだてよう」 〃 〃
ウ. 家族の様子から	○三世代家族が多い ○昔から住んでいる	・祖父母と交流する。 ・近所の人と交流する。	2年「遊ぶ物を作ろう」 2年「お祭りをしよう」 2年「わたしのきろくを作ろう」
エ. 地域や学校の行事の様子から	○めざめタイム ○御津南祭り ○音楽集会 ○どんぎ・ささおどり・七福神 ○家庭の日 ○地域の行事	・他学年と交流する。 ・自分たちの祭りをつくる。  ・祭りへ参加する。 ・家族との触れ合いを深める。 ・行事へ参加する。	2年「お祭りをしよう」  2年「お祭りをしよう」 1年「かぞくをしようかいしよう」 2年「わたしの町を調べよう」

資料6 御津南の子どもたちと、身近な社会や自然をどう関わらせたら良いか。(子どもに願う活動)

	実態	考えられる体験活動	単元・教科との関連
ア. 自然との関係から	○自然と遊び、働きかけることができない。	・自分なりに工夫して、自然と関わる。 ・自然を利用した遊びを追求する。調べる。 ・多くの時間、自然と触れ合う。 ・生き物を飼う。 ・生きる姿を注意深く見つめる。 ・植物を育てる。 ・生命の誕生に出会う。	1年「こうえんへいこう」 「あそぶものをつくろう」 「みとやまであきをさがそう」 「いきものをそだてよう」 2年「生き物を育てよう」 「植物を育てよう」 「わたしのきろくを作ろう」
イ. 社会との関係から (除: 学校社会)	○言葉がかげられない。  ○物を大切にしない。	・お店の人、駅の人、近所の人などと話す。 ・あいさつをする。 ・お客さんの応対をする。 ・電話をかける。受ける。 ・公共物を正しく使う。 ・自分で作る。	2年「こども郵便局をひらこう」 2年「わたしのきろくを作ろう」 1年「かぞくをしようかいしよう」 1年「こうえんへ行こう」 2年「わたしの町を調べよう」 2年「おもちゃ大会をしよう」

資料7 御津南の子どもたちに見つめさせたい自分自身の姿とは、どんなものだろう。(自分自身への気づきの態度的側面)

	実態	考えられる体験活動	単元・教科との関連
ア. 成長の過程を通して	○自分を育ててくれた人に気づいていない。	・思い出紙芝居を作る。 ・お世話になった人に手紙を書く。 ・生命の誕生に出会う。 ・赤ちゃんの頃のことを調べる。 ・お世話になった人と会食をする。 ・思い出整理箱を作る。	1年「もうすぐ2年生」 ” 2年「わたしの記録を作ろう」 ” ” ”
イ. 学校での生活を通して	○友人関係のひずみに気づいていない。  ○自分らしさに気づいていない。	・友だちのよさを見つける。 ・異学年と交流する。 ・近隣の子と仲良く遊ぶ。 ・自分の良さを見つける。	2年「わたしの記録を作ろう」 特活(1.6、2.5、3.4交流) 特活(めざまタイム) 2年「わたしの記録を作ろう」
ウ. 学校での生活を通して	○甘えに気づいていない。	・家族のよさを見つける。 ・自分でできる仕事をする。 ・お手伝いの計画を立てて、行う。 ・電話ごっこをする。	1年「かぞくをしようかいしよう」

資料8 御津南の子どもたちに、生活科を通して身につけさせたい生活上の習慣や技能は何だろう。(自分自身への気づきの習慣、技能的側面)

	実態	考えられる体験活動	単元・教科との関連
ア. 学習に関わること	○自己実現ができない。  ○指先が使えない。	・自分の考えをはっきりと発表する。 ・自分の考えを文に表す。 ・自分の思いを自由に描く。 ・動作化する。 ・ナイフ・ハサミのりを上手に使う。	生活科全般・他教科 生活科全般・国語 生活科全般・図工 生活科全般・音楽・体育・国語 生活科全般・図工
イ. 学校生活に関わること	○言葉使いが悪い。  ○単語で話す。 ○自分の責任を果たすことができない。	・目上の人に対して、正しい言葉で話す。 ・職員室での礼儀を守る。 ・正しい言葉で、言いたいことを伝える。 ・当番活動・係活動をしっかりする。  ・そうじを正しくする。	見学活動を含む単元・学指 1年「たのしい学校」・学指 生活科全般・国語 1年「いきものをそだてよう」 2年「生き物を育てよう」「植物を育てよう」・学指 1年「かぞくをしようかいしよう」・学指
ウ. 家庭での生活に関わること	○自分の健康に留意する力がない。 ○何事も親まかせである。 ○指先が使えない。	・季節に合わせて、衣服を調整する。  ・服をたたむ。  ・ひもを結ぶ。	1年「かぞくをしようかいしよう」・学指(冬のくらし) 1年「かぞくをしようかいしよう」・学指 2年「おもちゃ大会をしよう」

こうした地域や児童の実態をふまえて考えられた体験活動は、御津南部小の「単元主題」として生かされていった。そして、御津南部小では、文部省『生活科研究の視点／活動参考例』を参考に、生活科の単元主題を考えていった。御津南部小の考えた『単元指導計画』における単元主題は、表1の通りである。

表1 御津南部小の考えた『単元指導計画』における単元主題対照表

	御津南部小『生活科 単元指導計画』	文部省『生活科研究の視点／活動参考例』
第1学年	①たのしいがっこう	①学校めぐりをしよう
	②みと山へたんけんにいこう	②公園へ行こう
	③いきものをそだてよう	③生き物を育てよう
	④みと山であきをさがそう	④秋をさがそう
	⑤かぞくをしょうかいしよう	⑤家族を紹介しよう
	⑥あそぶものをつくろう	⑥遊ぶものを作ろう
	⑦もうすぐ2年生	⑦もうすぐ2年生
第2学年	①みと町をしらべよう	①わたしの町を調べよう
	②ザリガニさんと友だちになろう	②生き物を育てよう
	③ラッカセイをそだてよう	④植物を育てよう
	④雨の日を楽しくすごそう	③雨の日を楽しくすごそう
	⑤おまつりをしよう	⑤お祭をしよう
	⑥子どもゆうびんきょくをひらこう	⑧子ども郵便局をひらこう
	⑦おもちゃ大会をしよう	⑥おもちゃ大会をしよう
	⑧冬のくらしをしらべよう	⑦冬のくらしをしらべよう
	⑨わたしのきろくを作ろう	⑨わたしのきろくを作ろう

御津南部小『生活科 単元指導計画』と文部省『生活科研究の視点／活動参考例』を参考に筆者作成（網掛け部分は筆者）。

ここからは、御津南部小の考える生活科のカリキュラム編成におけるスコープ（領域）とシーケンス（配列）の特質について、以下の二点を指摘することができる。

一点目は、スコープ（領域）としての単元主題を、基本的に文部省『生活科研究の視点』の活動参考例に沿いながら、地域の自然や学級の特性の特性に応じて、具体的に設定している点である。それは、単元名を「公園」を「みと山」に変えたり、「生き物」を「ザリガニさん」、「植物」を「ラッカセイ」に変えたりして、学習内容を決定していることに現れている。

二点目は、シーケンス（配列）としての系統を、基本的に文部省『生活科研究の視点／活動参考例』の配列に合わせながら、学校の行事や単元の接続を考慮して変更している点である。それは、第2学年の配列として、②ザリガニさんと友だちになろう③ラッカセイを育てよう⑥子どもゆうびんきょくをひらこう、という順序が入れ替えられ、季節や学校行事に相応しいものとして設定されていたことが明らかになる。

以上のことから、御津南部小の生活科のカリキュラムでは、基本的に文部省『生活科研究の視点』の活動参考例に沿いながら、地域や学級の特性に合わせて、単元主題の決定が行われていたことが明らかになる。

#### 4. 『単元指導計画』の作成の実際

##### (1) 生活科マップと生活科ごよみ

御津南部小では、『単元指導計画』の作成に際し、以下の資料9<sup>20</sup>、図1<sup>21</sup>、2<sup>22</sup>のような「生活科ごよみ」や「みと町マップ」、「みと山たんけんマップ」を作成し、単元構想の参考にしていた。このような「生活科ごよみ」や「みと町マップ」、「みと山たんけんマップ」は、その後の生活科実践においても活用されたという<sup>23</sup>。

資料9 生活科ごよみ

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
単元名													
地域の行事	たこ作り（児童館） 御津山桜まつり	手作りたこ上げ大会		七夕会（児童館）	七夕まつり（児童館） 七福神・笹踊り	けん玉大会（児童館）	町民体育祭 お月見会（児童館）	商工まつり お月見会（児童館） 町民体育祭	収穫祭（児童館）	もちつき大会（児童館） どんぎ	御馬たこ上げ大会（児童館） 年賀状作り	ジャンボかるた取り大会（児童館）	節分・豆まき大会（児童館）
音羽川	タンポポ アブラナ			アブラゼミ	エノコログサ イノコズナ チカラシバ オヒシバ メヒシバ	スズムシ・コオロギ	オナモミ ススキ	ジュズダマ オナモミ ススキ		アカトンボ ショウリヨウバッタ トノサマバッタ	カマキリの卵		ツクシ アゲハチョウ テントウムシ アリ



これらの資料からもわかるように、御津南部小では、「生活科ごよみ」や「みと町マップ」、  
「みと山たんけんマップ」を参考に、地域や学級の特性に合わせて単元構想が行われていたの  
である。

## (2) 「みと山へ たんけんにいこう」の単元構成と見直し

最後に、生活科の単元構成と見直しが、どのようになされたかについて、具体的な実践事例を  
通じて論じる。ここでは、第1学年単元「公園へいこう」を取り上げ、その作成過程における単  
元構成の特質と見直しの様相について論じていきたい。

先述したように、第1学年「公園へいこう」の単元指導計画は、〔研究1年次〕1988年5月14  
日に、ペア学年会で作成された。当時の現職研修の記録に記されている教材発掘のための視点は、  
資料10<sup>24</sup>の通りである。

### 資料10 生活科の教材発掘のための視点

#### 「公園へいこう」(12時間扱い)の教材発掘のために

##### 1 教材発掘とその視点

- |  |  |
|--|--|
| (1) ○○公園では、どんなことに興味・関心を示すか。  | 子どもの生活経験・体験を探る<br>・子どもの遊び、日記・記述<br>・安全面の配慮   |
| (2) 子どもたちは、どんな活動をしたいと思うか。<br>ア. 公園で、どんな遊びの工夫があるか                     | 意欲的に取り組む活動・体験例<br>・中心的な活動と周辺の活動<br>・子ども自身が自信の持てる活動<br>・活動や時間の保証<br>・子どもの追求意欲、問題意識の持続性            |
| 新しい遊び 楽しい遊び  | 広場・スペースで<br>施設・設備を使って  |
| イ. 公園では、どのような発見があるのだろうか。   | 子どもの問題意識の持たせ方<br>—教師の現地研修—<br>①発問の工夫<br>②指示の与え方<br>③教材、資料の提示時間、方法の工夫<br>—時期のおさえ—                 |
| 子どもの未知の部分<br>子どもの目が届いていない所<br>新たな驚き・発見につながる<br>もの、ことがら               | 樹木<br>草花<br>虫・鳥<br>訪れる人<br>施設・設備   |
| ウ. 季節感を最もアピールするものは何か。<br>—春から夏への変化—                                  |  |
| 2 どのようなもの・ことがらを表現させ、「秋の公園」<br>の学習につなげるか。                             | 多様な表現活動の工夫<br>記録として残すもの<br>ことがら<br>他の単元との関連  |
| 3 自己認識を培うための留意点。   | 子ども自身の自己認識<br>・自分自身に目を向け気付く<br>・主観的な見方・考え方を持つ<br>・自分に自信が持てる学習活動<br>・自己とのかかわりで事実・事象<br>を体験的に感じ取る。 |
| 4 夏休みの生き物の世話を考えよう。<br>(1) 「学校めぐりをしよう」の小単元「生き物を育て<br>よう」の発展・継続として考える。 | 生き物  |

このような視点に基づき、実際に、以下のような5つの「公園へいこう」の指導計画例<sup>25</sup>が作成された。

- ① 2年作成「みと山じどうゆうえんで あそぼう」
  - ・ 学習の場「御津山児童公園」
  - ・ 目標が並列的で、公園の具体的な活動や体験の配当時間が足りない。
  - ・ 世間の人との触れ合いが少ない。
- ② 3年作成「こうえんへ いこう」
  - ・ 学習の場「市木公園」「椎木公園」（御津の町境に近い豊川市にある）
  - ・ 町外であるが、子どもたちの生活圏にある。
  - ・ 単元目標が1つの公園では達成できない。草、虫が多いが遊具が少ない等。
  - ・ 2か所が学習の場になっている。
- ③ 4年作成「みと山へ たんけんにいこう」
  - ・ 2年生の計画と共通点が多いが、子どもたちの探検（探究活動）という活動に特色がある。
  - ・ 2度も御津山に出かける「めあて」を子どもたちが持てるか。不明確になりはしないか。
- ④ 5年作成「みと山 だいすき」
  - ・ 表現活動が重視されている。
  - ・ 2度も御津山に出かけるが、授業のねらいと子どもの活動意欲との間にずれが生まれないか。
- ⑤ 6年作成「わたしとうみ」
  - ・ 学習の場「御津の海岸、海辺」
  - ・ 五感を生かした活動を重視した。
  - ・ 公園での活動の要素は除き、御津の地域を生かした単元を作った。

この五つの指導計画例について、現職研修全体会では、問題点の指摘と比較検討を行い、そこから『単元指導計画』の作成上の留意点について考えていったという。導き出された『単元指導計画』の作成上の留意点<sup>26</sup>は、以下の通りである。

- (1) 単元目標のすべての条件を兼ね備えた公園（学習の場）はない。それゆえ、目標に重点を置き、どのような具体的な活動や体験を中心に据えるかを明確にする必要がある。
- (2) 単元の目標をある程度充足している場であっても、子どもたちの生活圏、行動範囲から外れた場所では、子どもたちの視野に入れる活動の工夫や問いかけがポイントである。御津山児童遊園の場合、山の上の遊園地で、子どもたちの日常の遊び場ではない遊びの施設や自然に恵まれているが、人とのかかわりは見えにくい。
- (3) 他の単元、とりわけ「秋の公園」との関連では、学習の場が一か所である方が望ましい。
- (4) 地域の素材を生かし教材化を図るという視点から、「海」を選び、そこでの活動例を選定した6年の指導計画の立て方は、教材から目標へという手順の流れもあることを示している。

- (5) 人気の少ない公園や、安全面への配慮がある海での学習には、担任のみならず付き添いも必要である。
- (6) 生活科の共通理解を図ることを目的にして、ペア学年による作成に取り組んだために、学級の子どもたちの実態から離れている部分がある。授業実践にあたっては、実態をふまえた構想を練ることが大切である。
- (7) 単元の目標の表現に「～ができる」とあるが、「その子なりにできる」ことを目標にその具現化をはかる。(子どもを同一レベルにひきあげる意味ではない。)
- (8) 具体的な活動や体験を学習展開の中心に置き、活動意欲が持続されるよう意図したが、一人ひとりに「めあて」を持たせるための教材との最初の出会いの場面の設定が難しい。(教師の子どもへの日常的なとらえが前提になる)。

このように、1988年度の『単元指導計画』の作成過程では、単元の目標に重点を置き、具体的な活動や体験を中心に据えることが共通理解されていった。そして、実際の授業では、「御津山の山頂を活動の場にして、草花遊びやクワガタなどの虫探し、遊具を使った遊びなどがいろいろとできる」<sup>27</sup> といった考えに基づき、③4年作成の「みと山へ たんけんにいこう」の単元計画が採用され、授業実践が取り組まれた。資料10<sup>28</sup>には、[研究1年次]の「みと山へ たんけんにいこう」の単元の展開を示した。

#### 資料11 [研究1年次]「みと山へ たんけんにいこう」の単元の展開 (全12時間)

単元の目標		
	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) グループでの遊びを工夫し、仲良く遊ぶことができる。</li> <li>(2) 公共の施設を上手に使うことができる。</li> <li>(3) 春から夏にかけて樹木や草花、虫などに親しむことができる。</li> <li>(4) 自分の考えや経験を友だちに話して話すことができる。</li> <li>(5) 友だちと力を合わせて、遊園地づくりができる。</li> <li>(6) 友だちの良さを作品や発表などを通して気付くことができる。</li> </ol>	
単元の展開		
	学習活動・学習内容	指導上の留意点
みと山遊園地へ ①時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いつもどこで遊んでいるかな。</li> <li>①学校から帰ってからの遊びを話す。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ちびっこ広場</li> <li>・公園</li> <li>②公園で遊んだことのある子の話を聞く。                   <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊具</li> <li>・ボール遊び</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>・うちの庭</li> <li>・川</li> <li>・家の中</li> <li>・草花</li> <li>・虫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家の中の遊び、外での遊びを発表させる。</li> <li>・みと山遊園地では、いろいろな遊びができることに気づかせる。</li> </ul>
	○みと山遊園地についてみよう	・みと山での安全な道順を知らせ、信号や地下道にも目をむけさせる。

たんけんをしよう ③時間	○みと山ゆうえんちであそぼう（1時間） ①自由に遊ぶ。 ②遊んだことを発表する。  ○みと山たんけんたいをつくろう（2時間） ①自分の遊んだことを中心に探検隊をつくり、探検する。  ②探検したことを絵や文で表す。	・交通のきまりを守って安全に歩行させる。 ・行動範囲を決め、危険防止につとめる。  ・遊びの様子を観察する。 ・遊びの種類に分けて探検隊をつくり、さらに詳しく調べさせる。 ・出てきた遊びに応じて探検隊の名前をつけさせる。 ・みたこと、したことを簡単に書かせる。
みんなにおしえてあげよう ①時間	○たんけんしたことをみんなにおしえてあげよう。 ①探検したことを発表する。 ブランコ 鬼ごっこ はなつみ あり 回旋塔 かくれんぼ おおぼこずもう だんごむし 鉄棒 木のぼり 草笛 はさみむし 砂場等 はじめの一步 わたげ飛ばし  ②友だちの発表のなかから、自分のやりたいことを見つけ、再度探検の計画を相談する。	・探検隊ごとにカードを見せながら発表させる。  ・各自に目標を持たせる。
もういちどたんけんしよう ③時間	○もういちどみと山をたんけんしよう。 ①遊具、鬼ごっこ探検隊になって、道具を中心とした遊びをする。  ②草遊び、虫探し探検隊になって、虫や草花と親しむ。	・いろいろな体験をさせる。  ・なかよしの木を決めて、絵にかかせる。
みと山を作ろう ③時間	○みと山をつくろう。 ①なかよしの木を作る。 ②木の周りにあるものを作る。 ③遊んでいる自分を入れる。	・みんなで仲良くみと山をつくる。
発表会をしよう ①時間	○発表会をしよう。 ①自分の探検したことを発表する。	・作ったみと山を前に発表させる。 ・大きな声で元気よく発表させる。

この〔研究1年次〕の単元の展開では、具体的な活動や体験が学習の中心に置かれ、ダイナミックな体験活動が実施されていたことが明らかになる。また、単元構成の際には、「この単元は、2学期の『みと山で あきをさがそう』とつながっており、継続的な探検や観察・飼育を行うことによって季節の移り変わりや自然の変化を、自分との関わりで学ぶことができる」<sup>29</sup>といった単元の連続性についても考慮されていた。

そして、この「公園へいこう」の単元づくりを行うなかで、資料12<sup>30</sup>のような留意点を導き出すことができたという。

### 資料12 『単元指導計画』の作成上で留意すること

- ・身近な自然や社会などの地域の素材を知る。
- ・子どもを育て成長させる単元目標を設定する。
- ・子どもの生活圏の拡大を図る。
- ・教師が時期を外さない具体的な活動や体験の見通しを持つ。
- ・新たな活動意欲を生み出すための表現活動に工夫を加える。
- ・単元指導計画の修正・変更と指導計画の弾力化を図る。

ここからは、御津南部小学校が、地域や子どもの実態に応じて、『単元指導計画』の作成を行っていたことが示される。研究主任の田中實も、「公園へいこう」の留意点として、「公園の施設・設備、環境が学習のねらいの実現にとってどのような条件を満たしているかを検討すると同時に、子どもの遊び場として常時使われているかどうかを点検する実態把握も必要である」<sup>31</sup>と述べていた。そうした留意点への共通理解に基づいて、『単元指導計画』が見直され、〔研究2年次〕には、資料13<sup>32</sup>のような『単元指導計画』が作成された。

この〔研究2年次〕の単元の展開において特徴的である活動が、「一人ひとりのめあてを大切に、いろいろな体験をさせる」という活動である。ここからは、御津南部小学校が、一人ひとりの子どもたちの思いや気づきを生かした単元の展開を行っていたことが示される。また、〔研究1年次〕と〔研究2年次〕の単元の展開を比較すると、その違いについて、以下の二点を指摘することができる。

一点目は、単元の展開の中で、〔研究1年次〕では、具体的な体験や活動が重視され、〔研究2年次〕では、子どもの興味や関心が重視されているというように、単元構成が見直されていることである。それは、〔研究2年次〕の単元構成において、「木登り」「クワガタ」「草花あそび」「道具遊び」というように子どもの興味に合わせたグループが編成され、それぞれのグループに対する手立てが構想されていたことからわかる。

二点目は、単元の展開の中で、〔研究1年次〕よりも〔研究2年次〕において、評価の観点が明確化されていることである。それは、〔研究2年次〕の単元構成において〔興味・関心〕〔追求力〕〔表現力〕〔自分自身への気づき〕〔習慣・技能〕というように、評価の観点が具体化されていたことからわかる。

以上のことから、新教科創設期における御津南部小の生活科のカリキュラムの単元構成と見直しは、「みと山へ たんけんにいこう」の場合、学級の子どもに応じて弾力的に取り組みられ、子どもの興味に合わせた手立てや関心評価の観点などがより具体化されていったことが明らかになる。

資料13 「研究2年次」「みと山へ たんけんにいこう」の単元の展開（全12時間）

単元の目標

全体目標

- 季節の移り変わりによって、自然の様子や生活の様子が変わること気づく。
- 季節の変化と自分たちの生活とのかかわりに関心をもつ。

活動の具体目標

- (1) 興味・関心
  - ① グループで仲良く遊ぶことができる。
  - ② 春から夏にかけて樹木や草花、虫などに親しむことができる。
- (2) 追求力
  - ① 友だちの考えを取り入れたり、工夫して活動することができる。
- (3) 表現力
  - ① 自分の考えや経験を友だちに進んで話すことができる。
- (4) 自分自身への気づき
  - ① 友だちの良さを作品や発表などを通して気づくことができる。
- (5) 習慣・技能
  - ① 公共の施設を上手に使うことができる。
  - ② 友だちと力を合わせて、遊園地づくりができる。

単元の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
みとやまへいこう ②時間	○みと山へ行こう。① ①みと山公園で遊んだことのある子話を聞く。 ・遊具 ・草花 ・虫 ・展望台 ・おにごっこ  ②友だち話を聞いて生まれた「自分のやってみよう」を発表する。  ・自分のめあて  ○みと山へ行く準備をしよう① ①遊びたいことのグループを確認する ・クワガタグループ ・チョウ、バッタグループ ・草花あつめグループ ・道具遊びグループ ②グループごとに準備する持ち物を話し合う ・クワガタグループ （ピンセット、虫かご） ・チョウ、バッタグループ （あみ、虫かご） ・草花あつめグループ （ビニル袋等） ・道具遊びグループ （ダンボール等） ③安全な歩き方の約束をする。	・事前にみと山でとった花やクワガタを提示しておく。 ・みと山遊園地では、いろいろな遊びができることに気づかせる。 ・気づきカードに一人ひとりのやってみようを記入させ、グループ作りの目安とする。 ・めあては、幅を持たせる。  ・あらかじめだれと同じ活動をしたのかを板書し、知らせておく。板書を見て別のグループに移ってもよい。  ・それぞれの活動に必要なと思われる、自分の用意してきた物を自由に決める。	【興味・関心】 ○進んで発表することができたか。 ・発表のようす

<p>みと山こうえんで遊ぼう ③時間</p>	<p>○みと山公園で遊ぼう。③ ①グループでやりたいことをして遊ぶ。 ②遊んだことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クワガタとり</li> <li>・チョウチョとり</li> <li>・草花遊び</li> <li>・道具遊び</li> </ul> <p>③新しいやりたいことをグループを作って遊ぶ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通のきまりを守って安全に歩行させる。</li> <li>・草遊び等、教師側で意図した遊びも教えて興味を引きたい。</li> <li>・おもしろかったこと、失敗したこと、苦心していること等、自由に話す。</li> <li>・発表を聞いて他のやってみいたいことが生まれた子は、新しいグループに変えさせ楽しく遊ばせる。</li> </ul>	<p>[興味・関心] ○グループで楽しく活動することができたか。 ○樹木や草花、虫などに親しむことができたか。 ・活動のようす</p>
<p>みんなにおしえてあげよう ③時間</p>	<p>○みと山公園で遊んだことを絵や文にかこう。① ○楽しかったことをみんなに教えてあげよう。① ○遊んだことを、前時にかいた絵と文をもとに発表する。①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・木登り</li> <li>・ねじり花遊び</li> <li>・オオバコの引っ張り相撲</li> <li>・わた毛飛ばし</li> <li>・クワガタとり</li> <li>・アゲハチョウ</li> <li>・草笛</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ毎に前に出て発表させる。</li> <li>・新しい遊びや、友だちの木やその子独自の気づきを発表した子を取りあげてほめる。</li> </ul>	<p>[表現力] ○楽しかったことを友だちにわかるように伝えることができたか。 ・発表のようす</p>
<p>もういちどみと山にいこう ④時間</p>	<p>○もういちどみと山へ行ってやりたいことをきめよう。① ①友だちの発表の中や自分のめあてをきめ、再度探検の計画を立てる。 ・自分のめあて ・学級でのとりくみ ②持ち物の見直しをする。 ・木登り 一軍手 ・クワガタ一みつ 一懐中電灯 ・草花遊び一図鑑、綿、箱 一スケッチ帳 一クーピーペン ・道具遊び一ボール等 ○もう一度みと山で遊ぼう ①めあてにそってグループで遊ぼう。① ②友だちの木をきめて、木のぼり大会を開こう。① ・なかよしの木を描こう。 ・草遊び会を開こう①</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のしたいことも保障し、学級全員に体験させたいことも入れさせる。</li> <li>・前時の失敗を生かした道具の準備をさせたい。</li> <li>・一人ひとりのめあてを大切に、いろいろな体験をさせたい。</li> <li>・一人ひとりに自分の木を決めさせ、触ったり登ったりさせたい。</li> <li>・八切り程度の紙に木と自分を描かせる。葉の色もよく見て描くように指示する。まわりの色も目を留めて描けた子をほめ、他の子に注意を向けさせる。</li> </ul>	<p>[追求力] ○友だちの考えを取り入れて活動することができたか。 ○持ち物を工夫することができたか。 ・活動のようす  [興味・関心] ○自分のめあてにそって進んで行動することができたか。 ・活動のようす</p>

みと山発表会をしよう ①時間	<図工> ○ねん土で「みと山で遊んだ自分」を作ろう。  ①自分の作った作品を発表し、みと山での思い出をふりかえる。①	・思い出を話した後で製作させる。  ・楽しかったこと、できるようになったことを思い出し振り返ってみるカードに書く。	[自分自身への気づき] ○活動を通して友だちや自分自身の良さや取り柄に気づくことができたか。 ・カードより
-------------------	---	---	---

## 5. 研究の成果と課題

本稿では、新教科創設期における生活科のカリキュラム開発を代表する事例として御津南部小を取り上げ、その特質について検討してきた。本稿で明らかになった当時の御津南部小による生活科のカリキュラム開発の特質は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、御津南部小の生活科カリキュラムの開発研究が、研究主題「自ら考え進んで行動できる子どもを育てる授業をめざして」に基づき、全校体制で組織的、計画的に取り組まれていたことである。新教科創設期における御津南部小の生活科のカリキュラム開発は、「児童理解」「授業研究」「合科・総合的学習」という三つの部会のもと、各年次において課題を持って取り組まれていた。また、御津南部小では、「子どもから始まり、子どもで終わる」研究をめざして、生活科のカリキュラム開発の研究が取り組まれていたことも明らかになった。

第二に、御津南部小の生活科のカリキュラム編成が、教科の枠を超えながら地域や子どもの実態をふまえて、自発的な課題をもって取り組まれていたことである。御津南部小では、スコープ（領域）としての単元主題を、基本的に文部省『生活科研究の視点』の活動参考例に沿いながら、地域の自然や学級の特性的特性に応じて設定していた。また、シークエンス（配列）としての単元主題の系統を、基本的に文部省『生活科研究の視点』の配列に合わせながら、学校の行事や単元の接続を考えて変更していたことも明らかになった。

第三に、御津南部小の生活科のカリキュラムにおける単元構成と見直しが、年次ごとに学級の子どもの実態に応じて弾力的に行われ、子どもの興味に合わせた手立てや評価の観点などがより具体化されていったことである。単元「みと山へ たんけんにいこう」の場合、[研究1年次]では、「みと山たんけんたいをつくろう」「なかよしの木をつくろう」「みと山を作ろう」という活動が行われていたが、[研究2年次]では、「一人ひとりのめあてを大切にして、いろいろな体験をさせる」という活動が取り組まれていた。したがって、御津南部小では、生活科のカリキュラムと地域の特色や学級の子どもの実態とを照らせ合わせながら、弾力的な生活科の単元構成を行い、各年次において見直していたことが明らかになった。

本研究の成果として、御津南部小を事例として、新教科創設期における生活科のカリキュラム開発の実態を具体的に示すことができたと考える。なお、かつて御津南部小において生活科の授業研究に関わっていたT先生は、筆者の実施した質問紙調査に対して、「たくましい子どもたち

とその活動に興味づけをしてくれる先生方が周りにいて下さったことで、迷いながらも、決して不安はなく、とても楽しく充実していた<sup>33</sup> という当時の生活科のカリキュラム開発研究の様子について答えていた。

今後の研究課題は、そうした新教科創設期における御津南部小での生活科のカリキュラム開発の成果が、その後の生活科のカリキュラムに、いかなる点で引き継がれていったかという点について考察を深めることである。

## 謝 辞

本研究に際し、愛知県豊川市立御津南部小学校の先生方より、当時の取り組みに関する貴重な資料の提供を受けた。また、質問紙調査の実施において、元愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の先生方より、多大なる協力を得た。この場を借りて感謝を表したい。

**付記** 本研究は、JSPS科研費（15K17411若手研究(B)「子どもの思いや気づきを生かす生活科の授業づくり—新教科創設期の実践に学ぶ—」）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 【注】

- 1 吉富芳正・田村学（2014）『生活科の形成過程に関する研究 新教科誕生の軌跡』東洋館出版社。
- 2 柴田義松・中野光（1993）「対談：これからの低学年教育」水越敏行・吉本均編著『生活科と低学年カリキュラム』ぎょうせい，日本標準，p.335.
- 3 愛知県御津町立御津南部小学校（1990）『子どもの思いや気づきを生かす 楽しい生活科の授業』黎明書房。
- 4 中野重人（1990）「発刊によせて」愛知県御津町立御津南部小学校『子どもの思いや気づきを生かす 楽しい生活科の授業』黎明書房，p.1.
- 5 福應謙一（2013）「愛知県三河地域における生活科模索期の授業創りについて」愛知教育大学生生活科講座『生活科・総合的学習研究』第11号。
- 6 木村博一（2009）「地域教育実践の構築に果たした社会科教師の役割—愛知県三河地域における中西光夫と渥美利夫の場合—」全国社会科教育学会『社会科研究』第70号等を参照。
- 7 研究開発校とは、学習指導要領を改定する際に、文部科学省によって指定された独自に新しい教育課程や指導方法の開発を行う学校のことである。久野弘幸（2009）「研究開発学校と授業研究」日本教育方法学会編『日本の授業研究 下巻』学文社を参照。なお、2000年以降は、各学校による申請方式に変更された。
- 8 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校（1988）『生活科への取り組み—実践のあらまし—』三河教育研究会主催発表会レジメ，1988年11月22日付，p.2.
- 9 福應謙一・野田敦敬（2011）「生活科の発足時における授業実践についての一考察」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』第60号。
- 10 注)3，p.2.
- 11 同前，同書，p.4.
- 12 同前，同書，p.10.
- 13 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校（1989）『自ら考え進んで行動できる子どもを育てる授業をめぐって—生活科研究（2年次）発表会—』1989年10月31日，p.2.

- <sup>14</sup> 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校（1989）『自ら考え進んで行動できる子どもを育てる授業をめざして—生活科研究（1年次）発表会—』1989年1月24日，p.41.
- <sup>15</sup> 注)8，p.7.
- <sup>16</sup> 同前，同書，p.8.
- <sup>17</sup> 同前，同書，p.9.
- <sup>18</sup> 萩原正彦（1990）「地域の特色を生かした指導計画の作成—日々の生活を豊かで生き生きとしたものにするために—」全国連合小学校長会編集『小学校時報』No.467，1990年7月，p.15.
- <sup>19</sup> 田中實（1989）「実践活動が子どもを育てる」『季刊 こころの教育』第3号，1989年4月，pp.155-156.
- <sup>20</sup> 注)3，p.15.
- <sup>21</sup> 同前，同書，p.16.
- <sup>22</sup> 同前，同書，p.17.
- <sup>23</sup> 田中實（1992）「子どもが活用する生活科マップ活用のポイント」『教職研修 総合特集 生活科校外活動読本』No.91，教育開発研究所，1992年5月.
- <sup>24</sup> 注)8，p.5.
- <sup>25</sup> 同前，同書，p.6.
- <sup>26</sup> 同前，同書，同頁.
- <sup>27</sup> 注)3，p.18.
- <sup>28</sup> 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校（1989）『1年 生活科 単元指導計画』1989年10月，p.10.
- <sup>29</sup> 同前，同書，同頁.
- <sup>30</sup> 注)3，p.18.
- <sup>31</sup> 田中實（1989）「生活科の実践にともなう留意点は何か」『教職研修 総合特集 生活科読本』No.61，教育開発研究所，1989年11月，p.101.
- <sup>32</sup> 注)28，pp.10-11.
- <sup>33</sup> 当時の御津南部小の関係者への質問紙調査「生活科の授業づくりに関するアンケート」（2016年5月実施）の回答より。

受理日 平成29年9月28日